

昭和 5 2 年 度

南加賀古窯跡群詳細分布調査事業  
概 要 報 告 書

小松市教育委員会

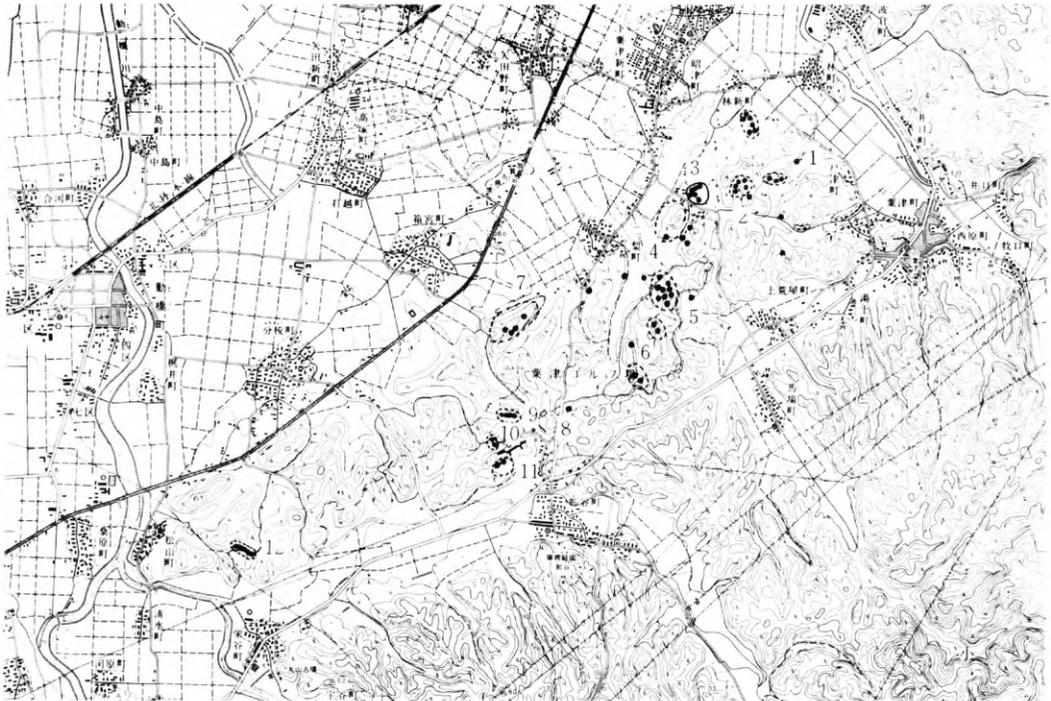


# 昭和52年度 南加賀古窯跡群詳細分布調査 事業概要報告書

## 1. 調査の契機

南加賀古窯跡は、小松市の南部から加賀市北部にかけて広がる江沼平野に面した標高20～40mの微高地に所在する須恵器窯跡及び中世窯跡の総称である。

昭和25年、高堀勝喜、上野与一により県下で最初の須恵器窯跡の発掘調査が実施されて以来、今日まで十数基の須恵器窯跡が顕現されている。しかしいずれも開発事業にともなう事前調査であり、調査完了後に消滅する場合が多く、保護対策が記録保存という極めて消極的な保護対策しかとられなかった。なかでも、昭和44年の加賀芙蓉カントリーゴルフ場造成では、保護対策が講ぜられないまま、あたら多くの窯跡が壊滅した。その後、昭和48年のゴルフ場2次造成に際しては、



南加賀古窯跡群主要窯跡分布図

- |                   |                 |
|-------------------|-----------------|
| 1 戸津5号窯跡（平安）      | 7 箱宮古窯跡群（奈良～中世） |
| 2 六字ヶ丘古窯址群（平安）    | 8 那谷1号窯跡（鎌倉）    |
| 4 一貫山古窯址群（奈良末～平安） | 9 小天王谷古窯址群（中世）  |
| 4 豆岡山古窯址群         | 10 大天王谷古窯址群（鎌倉） |
| 5 二ツ梨古窯址群（仮称）     | 11 カミヤ古窯址群（中世）  |
| 6 奥谷1号窯跡（平安末～鎌倉前） | 12 分校古窯址群（古墳）   |

先の教訓を生かし、分布調査で確認された窯跡は現状保存する方針の基に、保護対策の一応の成果を得た。

近年、加賀産業開発道路やカドミ対策事業の一貫として土砂採取工事、土地改善事業などの種々の開発行為が計画されており、抜本的な保護対策を講ずることが急務となっている。このような状況のもとで、昭和52年度において、南加賀古窯跡群のうち小松市域約4.945m<sup>2</sup>の詳細分布調査を実施することとし、国庫50%、県費25%の補助をえ、小松市が主体となり、次の各先生方の協力をえた。

◎調査指導員◎

高 堀 勝 喜	石川考古学研究会長	金 沢 市
上 野 与 一	石川考古学研究会幹事	加 賀 市
橋 本 澄 夫	” ”	金 沢 市
岡 本 穰	石川考古学研究会員	小 松 市
山 本 七 郎	”	”
土 井 輝 男	小松市立博物館専門委員	”

◎地元指導員◎

新 谷 盛 久	那谷町々内会長
橋 本 一 男	上荒屋町 ”
南 出 良 政	下粟津町 ”
山 本 清 太 郎	戸 津 町 ”
岡 島 吉 次	林 町 ”
吉 村 洋 志	二ツ梨町 ”
大 吉 勇 双	矢田野町 ”

○調査事務局

藏 藤 佐 一		小松市教委社会教育課々長
坂 本 孝 暉		” 課長補佐
宮 越 穰	(事務局調査員)	” 文化係長
小 村 茂	( ” )	” 文化係主事
宮 下 幸 夫	(事務局調査員)	” 文化係主事

2. 調査の方法と経過

調査は南加賀古窯跡群のうち小松市域分を3地域に区分し本年度はA・C地区約1.783m<sup>2</sup>を対

象とした。さらに、昭和44年に発見された中世窯跡と須恵器窯跡及びその他の遺跡とを区別し、まず、中世窯跡のうち保護対策の立ち遅れているカミヤ古窯跡群及び小天王谷古窯跡群の範囲・基数及び年代等の確認作業を7月1日より実施した。須恵器窯跡については落葉期をまって、10月より既に確認されている窯跡の年代及び範囲の確認と窯跡の発見を重点に実施した。

カミヤ古窯跡群は、地表観察の結果、極めて広範囲に亘って陶片の散乱が認められたため、調査開始当初に複数の窯跡所在が想定された。斜面上方より等高線に沿って6本のトレンチを設定したが、第1・2・4トレンチ及び第5トレンチでは地表下約20cmで地山が露呈した。第3トレンチでは若干の陶片が検出されたが、檜林及び戦時中の畑地造成時に削平され、上方へ投げ込まれたことが判明した。第6トレンチでは巾約17mにわたって多量の陶片が検出されたが、終戦時に畑地として一部削減している。窯体は確認できなかった。

小天王谷古窯跡群では陶片散乱箇所が2箇所あり、東方を1号窯、西方を2号窯とした。

2号窯灰原は現在の農道面に露呈しており、残存する面積は約267.7m<sup>2</sup>、斜面傾斜角約5度で窯体に至る。1号窯灰原は現農道下にあり、大半は農道造成時に消滅しており、農道崖に陶片が確認される。窯体は残存すると思われるが、表上よりかなり深部に存するものと想定される。1号窯第1トレンチでの陶片出土はなく、第2トレンチに灰原の一部が検出された。小天王谷古窯跡群は今日までその基数をめぐって研究者間で意見の相違があり、今回の調査で2基の中世窯で構成されていることが判明した。

須恵器窯跡は、既に存在が想定されているものについては小ピット程度の試堀にとどめ、範囲及び時代を確認した。

以下、調査日誌にもとづき経過を述べる。

5月20日

指導員会議開催。参加者、高堀勝喜、橋本澄夫、土井輝男、岡本 穰の各指導員及事務局より蔵藤、宮越、小村。事業内容の説明ののち、今後の調査方法等について協議する。

6月 9日

事業内容について各地元指導員と打ち合せをおこなう。那谷地内の調査予定箇所の地主承諾を受ける。

6月13日

カミヤ及び小天王谷古窯跡の調査範囲について地主と打ち合せを行い、午後、地形測量を実施する。

7月 1日

調査地域と地積の照合、午後、人夫の依頼を行う。

8月 1日

中世窯跡カミヤ古窯の調査を開始。まず調査区域の伐採を実施。午後、トレンチ設定の準備を行う。

8月 2日

伐採を継続。表面採集作業を開始する。

8月 3日

伐採を継続。午後、雑木の跡仕末を行い調査区内に斜面に沿って上方より第1、2トレンチを設定、調査区西方に第3、4トレンチを設定する。

8月 4日

第1、2、3、4トレンチの掘り下げ開始。遺物の出土なし。

8月 5日

第1～4トレンチの掘り下げ継続、遺構、遺物の検出なし。第3トレンチの下方、斜面傾斜角の変化する箇所に第5トレンチ、さらに下方に第6トレンチを設定する。第4トレンチ東方にてこね鉢出土があったが、地表約20cmにて地山が露呈した。

8月 9日

第5トレンチで窯体の一部と思われる焼床面を検出したが窯尻付近と判明。第6トレンチでは木炭及灰に混ざり多量の陶片が出土し、広範囲な灰原の存在を想定させる。

午後、一部の人員にて小天王谷古窯付近の伐採を開始する。

8月 10日

カミヤ窯は広範囲な灰原が存在するが窯体は既に消滅していることが判明。写真撮影のうち一部埋め戻しを開始する。

小天王谷古窯の伐採を継続。

8月 11日

小天王谷古窯跡の調査区西方に第1トレンチ、斜面傾斜角の変化する箇所に第2トレンチを設定する。第1トレンチの掘り下げを開始する。

8月 12日

第2トレンチの掘り下げを開始。第2トレンチ西方より約3.5mの地点で灰層を確認。スリ鉢こね鉢、甕破片の出土あり。第1トレンチでは遺構、遺物の出土なし。

8月 13日

第2トレンチ中央にて灰層限界を確認、窯壁の一部が散乱窯体の存在を想定する。第1トレンチは深さ約1m20に至っても遺構、遺物の検出がなく放棄する。

8月16日

第2トレンチを東方へ6m延長。こね鉢を確認したが灰層は認められなかった。

8月17日

調査区東方斜面に第3トレンチを設定、その下方に第4トレンチを設定する。第3トレンチは約50cm掘り下げたが遺構遺物の検出なし。第4トレンチでは僅に灰層を確認したが、窯体は認められなかった。

8月18日

第4トレンチを放棄。窯体、灰原は現農道下にあり、農道崖に遺物を確認する。

8月19日

小天王谷地区の埋め戻し作業を開始。

8月20日

カミヤ地区の埋め戻しを再開。小天王谷地区の埋め戻し作業完了。出土遺物の運搬を始める。

8月22日

カミヤ地区の埋め戻し作業完了。出土遺物、機材を運搬。

☒ 須恵器窯跡確認一覧 ☒

石川県 No.	小松市 No.	名 称	所在地	地 目	時 代	
		一貫山 9号窯跡	二ツ梨	雑木林	平安(後)	
		一貫山 10号窯跡	〃	〃	〃	
689	112	戸津 3号窯跡	戸津	〃	平安(末)	
690	113	戸津 4号窯跡	〃	〃	〃	
	324	戸津 8号窯跡	〃	〃	平安(後)	
	325	戸津 9号窯跡	〃	〃	〃	
		戸津 11号窯跡	〃	果樹園	平安(中)	
		戸津 2号窯跡	〃	雑木林		
		戸津 3号窯跡	〃	〃		
697	120	林 1号窯跡	林	〃	奈良(後)	
698	121	林 2号窯跡	〃	〃	〃	
		林 8号窯跡	〃	〃	平安(初)	
		那谷 2号窯跡	那谷	果樹園	奈良(末) 平安(初)	

### 3. 遺物

今回の調査で得た遺物は第3、4図に掲げたものである。表採資料をも含んでいるが、トレンチ調査で得た資料との差異が認められないので、ここでは一括して扱うことにする。

第3図はカミヤ古窯灰原の出土陶片である。大甕は口縁部の折り返しが強くなり、肩部はなで肩で、球形に近い胴部をもつもの(2がある。N字状口縁が退化的様相をおびてくるのも本窯の特徴といえよう。大甕底部底面は板おこし痕を残すものが多いが、なかには杉材(?)粧目板で撫つけた痕跡をとどめるものがある。押印は3種類確認されたが、いずれも図案化が進んでいる。

擂鉢は通有の形態をとるもので、目立った特徴は認められない。こね鉢の出土もあるが量的には少ない。

本窯において初めて壺類の焼成が確認された。肩部より胴部にかけて球状に近く、胴下半より直線的に肩部に至る形態をとるが、口縁部については不明である。

小天王谷古窯跡の灰原出土遺物は第4図に示したもの他若干あるが、1号窯灰原、2号窯灰原の各出土遺物に時間差が認められないため、2号窯灰原出土陶片の概要を以下に述べる。甕は口径30cm～48cmで中形甕に属するものである。口縁は先ぼそりに直立する形態で、肩部の張りは強い。肩部より胴部にかけての内面に指頭による横位の押捺痕が顕著に認められる。擂鉢は、口径に比して小さい底部から直線的に口縁に至るもので、底部底面に大きな貼り高台を付すものが目立っている。

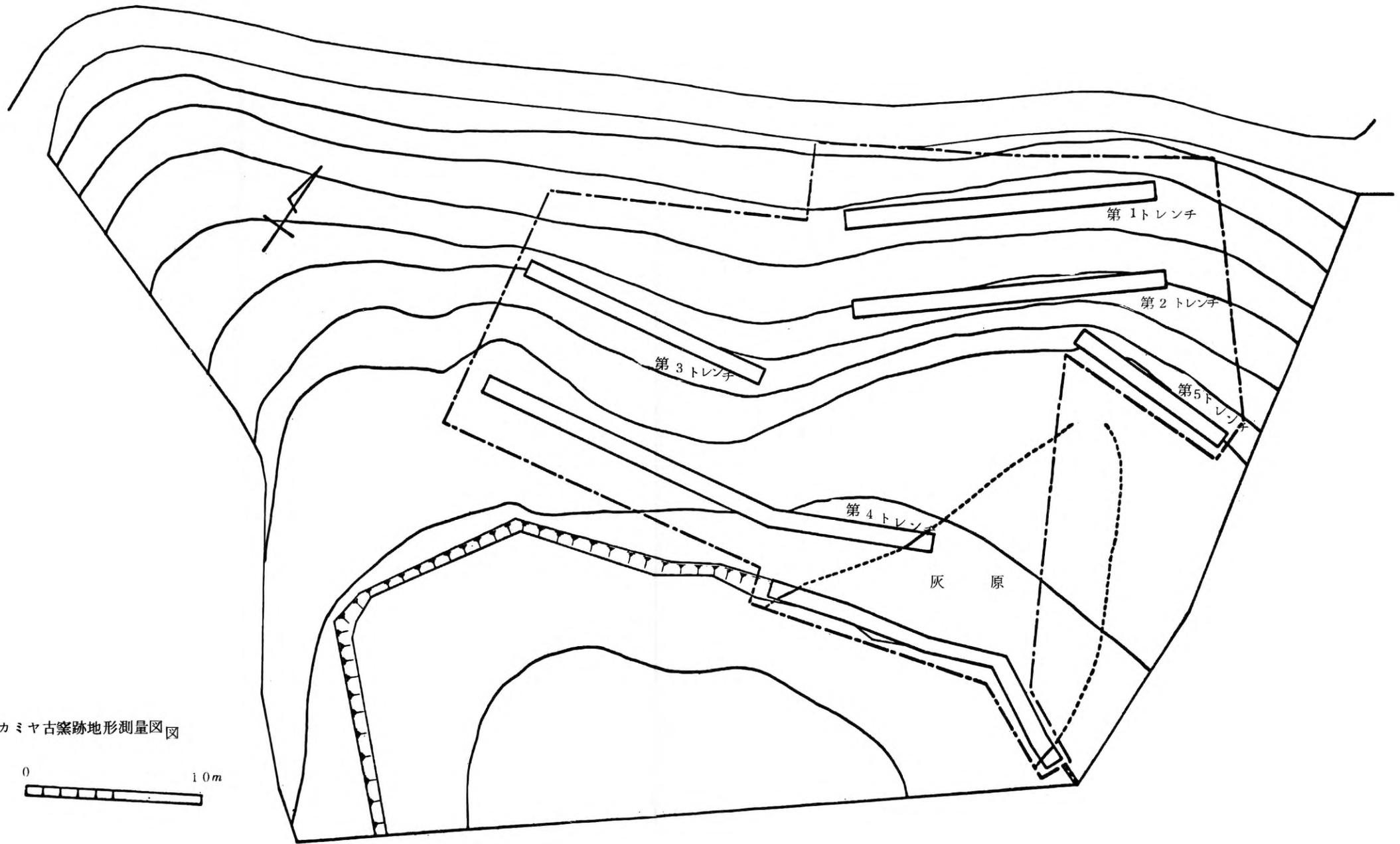
以上、カミヤ古窯、小天王谷古窯の出土遺物について概略を述べたが、これらは従来の加賀古窯研究を大きく訂正する要素をもっている。とくに、小天王谷古窯で認められた擂鉢に高台を付す特徴は、越前窯の製品との峻別に極めて有効な特徴であった。このことは築窯技術や製品の成形、整形技術等とともに共通する越前窯などの瓷器系中世窯との相関々係の究明に新たな問題を提起する。さらに近年越前において灰釉陶器の生産が明らかになったといわれており、須恵器窯の発展から灰釉陶器の生産へ、さらに越前焼への前進は加賀の古代須恵器生産から加賀古窯への移行という一連の発展過程とはけっして無縁ではない。既に調査された須恵器窯跡や遺物の再検討を通して、加賀中世窯業の抬頭する母体を越前や東海地方との関連において考えていかなければならない。

### 3. ま と め

今次調査において判明した新たな知見を略述すると、まず基数については、カミヤ、小天王谷古窯ともに、広範な灰原を有するところから従来基数(5～6基)の窯跡が想定されていたが、カミヤ古窯では1基、小天王谷古窯では2基の窯体の想定がより確定的になった。したがって各窯跡

を構成する窯跡単位は小さく、各窯業地点での作業時間が比較的長いと考えられる。第2に、先にも述べたがカミヤ古窯期（南北朝期～室町初期）に至って最初に壺類の焼成が確認された。このことは、墳墓・経塚から発見される小天王谷古窯期（鎌倉初期）の壺類を焼成した窯跡の存在を想定させる。第3に、従来考えられていた越前窯との関連が、摺鉢の形態、大甕の整形技法の類似により再考をせまられたことである。以上簡単に今次調査の成果の一部を述べたが、次期調査の完了をまって保存策を考えたい。

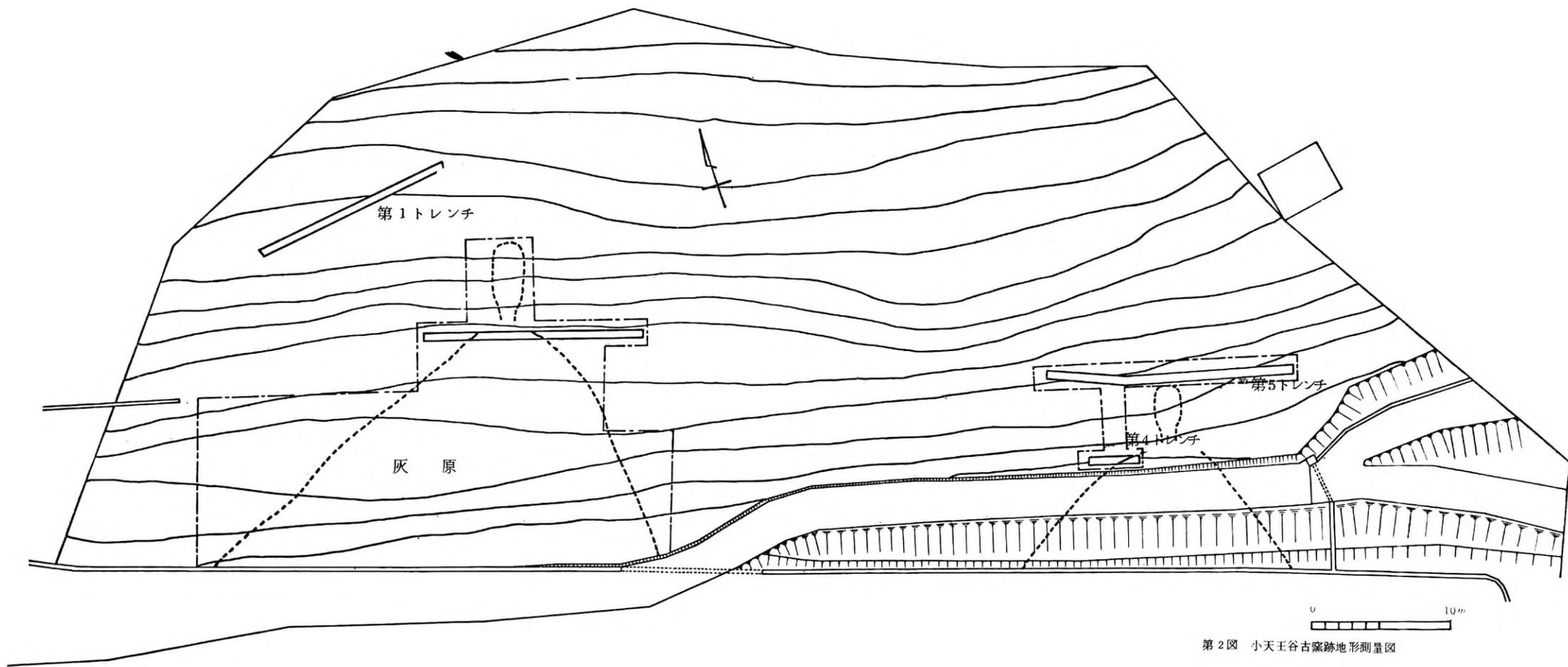




第1図 カミヤ古窯跡地形測量図

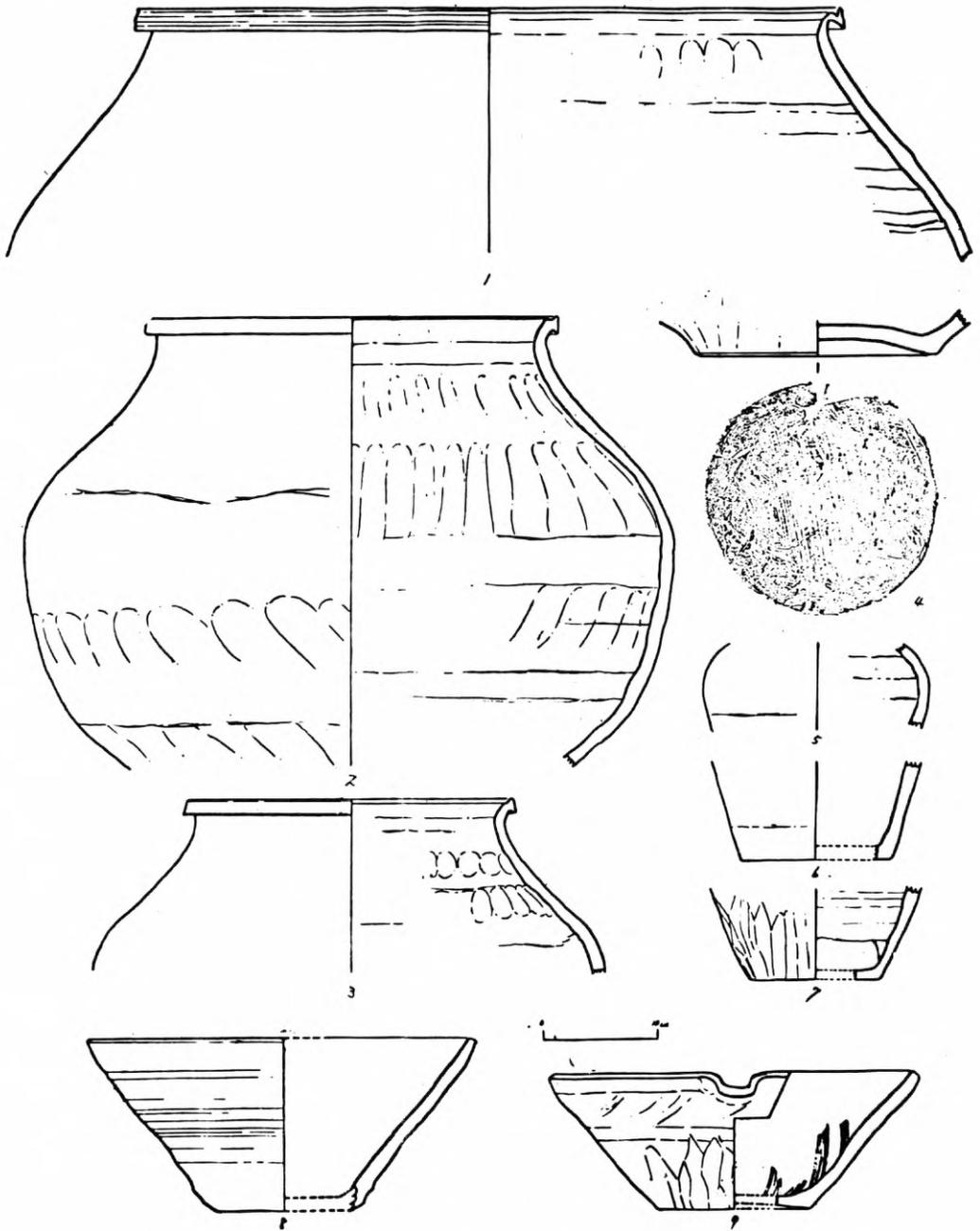




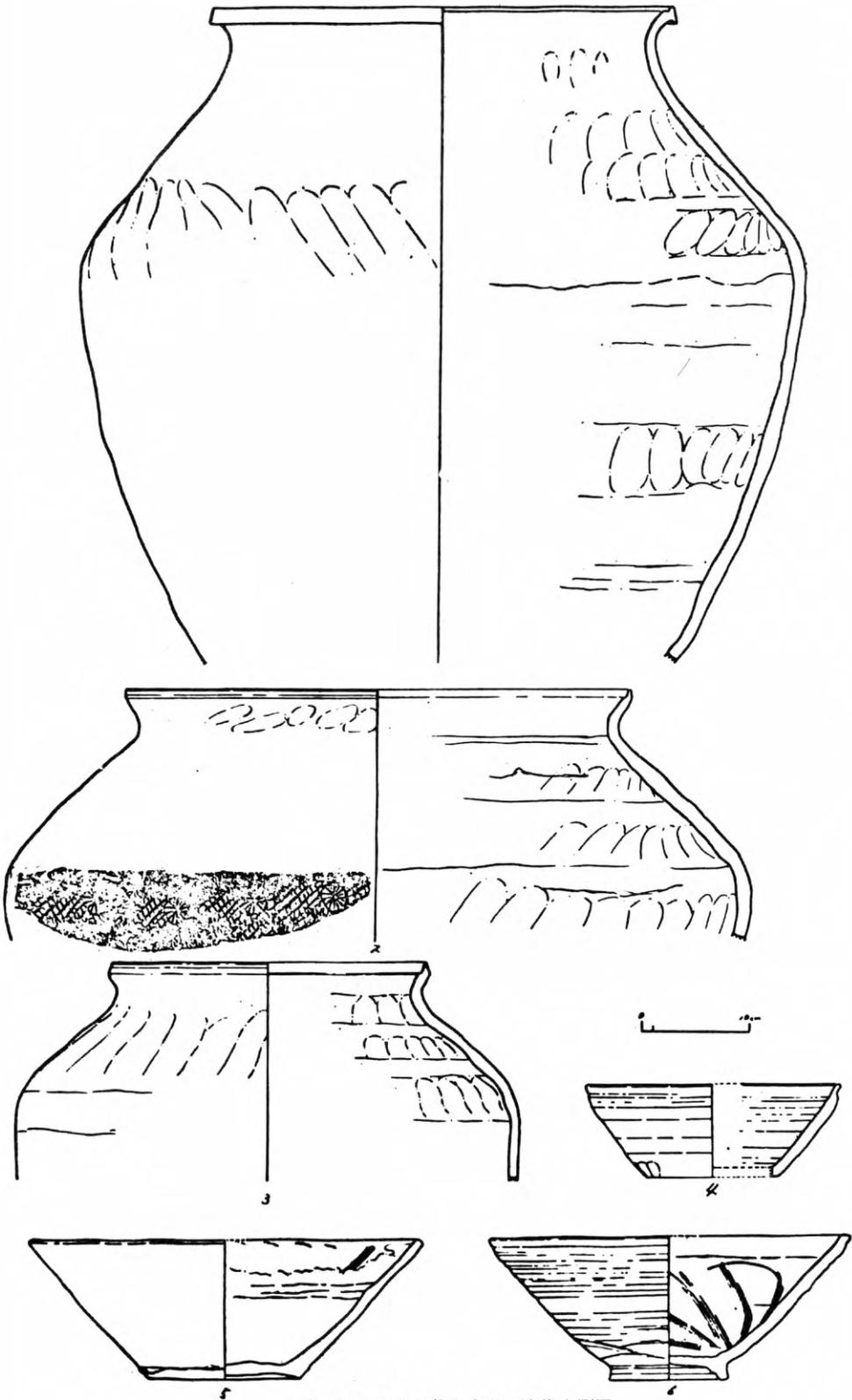


第2図 小天王谷古窯跡地形測量図





第3図 カミヤ古窯跡出土遺物実測図



第4图 小天王谷古窯出土遺物実測図



カミヤ古窯調査前状況（遺跡上方より）



カミヤ古窯調査状況（遺跡上方より）



カミヤ古窯調査状況（遺跡東方より）



カミヤ古窯第4トレンチ完掘状況  
（遺跡西方より）



カミヤ古窯第2トレンチ調査中状況  
（遺跡西方より）



カミヤ古窯第3トレンチ完掘状況



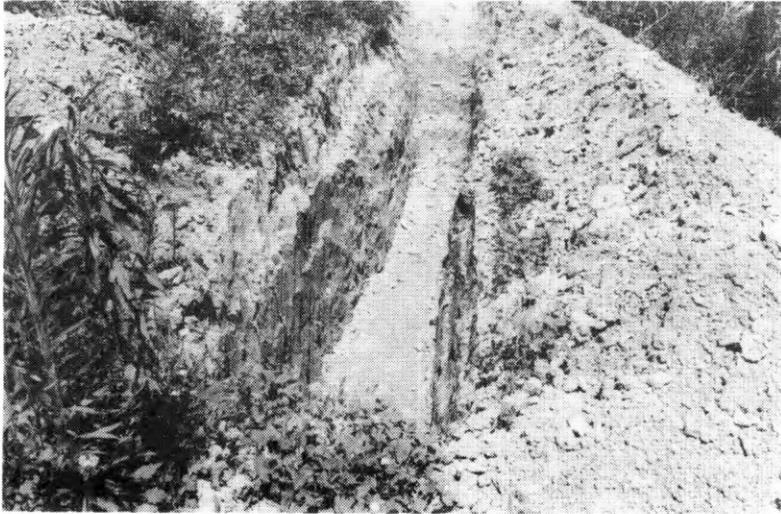
小天王谷2号窯全景（遺跡下方より）



小天王谷古窯第2トレンチ完掘状況



小天王谷1号窯第3トレンチ完掘状況(遺跡東方より)



小天王谷第1トレンチ完堀状況（遺跡西方より）



戸津9号窯試堀状況

